

勝軍地蔵と「日輪御影」

黒田智

Shogun Jizo and "Nichirin-no-Miei"

序

- ① 応長・正和の三神影向伝説
- ② 勝軍地蔵の化身としての鎌足
- ③ 三つの円光

結

【論文要旨】

勝軍地蔵とは、日本中世における神仏の戦争が生み出した軍神であつた。その信仰は、観音靈場を舞台に諸権門間の対立・内紛といった戦争を契機として誕生した。

そして征夷大将軍達の物語とともに、その軍神的性格を色濃くしていった。

多武峯談山神社所蔵「日輪御影」は、いわば勝軍地蔵誕生の記念碑的絵画であった。

「日輪御影」は、応長・正和年間（一一一〇～一二〇）に、興福寺との合戦に際して

戦場となつた多武峯冬野における日輪出現と、その周辺の観音勝地で起つた三神影

向伝説を絵画化したものである。画面下方に描かれた東方に甲冑を着した三眼の異人

は、良助法親王と推測され、彼が喧伝した勝軍地蔵を想起させる。画面上方の円光中

に描かれた藤原鎌足像は、三眼の異人と対をなして勝軍地蔵の化身として配置されて

いる。また画面上部に描かれた三つの円光は太陽・月・星であり、山王三聖信仰を背景とする三光地蔵の表象である。

「日輪御影」に表された勝軍地蔵信仰の世界觀は、三光の多様な言説を背景として、鎌倉中期から南北朝期にかけて浮上する太陽・日輪の文化の急速な波及と密接に関わっている。太陽・日輪イメージは、勝軍地蔵信仰と結びついて、戦う神仏のイデオロギー・武威のシンボルへと収斂していたのである。

こうした太陽・日輪イメージは、天空における太陽の月・星に対する優位性が日本という国家・国土の優越性に準えられた思想であった。それは、日本の神仏の優位性を主張し、日本という国土を神聖化し、日本を仏教的コスモロジーの中心に位置付けようとする運動であった。勝軍地蔵信仰は、同時代の中世的国家・国土觀念と不可分な結びつきをもちながら、後代に少なからぬ影響を及ぼしていくのである。